

裕次郎を発掘し、日活の全盛期を作った ターキー水の江滝子

1955年に日活で日本初の女性プロデューサーとなった。1956年に映画「太陽の季節」を製作した際、原作者石原慎太郎氏の弟の故石原裕次郎にスター性を見いだして主人公の友人役で起用した。「自分がこれと思った人は何と云っても育てたかった」という水の江さんは、裕次郎を「狂った果実」の主演に抜てきし、赤木圭一郎、浅丘ルリ子、故岡田真澄、和泉雅子、津川雅彦らを発掘してスターに育て上げた。70年にプロデューサーを辞めるまでの15年間で76本の映画を製作、日活の黄金時代を築いた

男装のスター「ターキー」の愛称で親しまれ、プロデューサーとして故石原裕次郎らを発掘した元女優水の江滝子(みずのえ・たきこ)さんが16日午後6時45分、老衰のため神奈川県内で死去した。94歳だった。SKDから映画、テレビで活躍し、1985年におの故三浦和義氏のロス疑惑事件で騒がれたこともあった。1993(平成5)年に故森繁久弥さんを葬儀委員長に「生前葬」を行った後は表舞台から遠ざかった。森繁さんに続き、昭和の芸能界に大きな足跡を残した人がまた1人逝った。

最期は眠るような大往生だった。養女によると、水の江さんは3月に肺炎で入院。4月に退院したが、その後も入院を繰り返した。16日も昼前まで容体は安定していたが、夕方に急変し、養女ら家族にみとられて息を引き取った。密葬を済ませ、故人の遺志でお別れの会は行わない。

半生は昭和の芸能史そのものだった。1928年、13歳で東京松竹楽劇部(後の松竹少女歌劇団=SKD)第1期生で入団。1930年、髪をショートカットにしたタキシード姿で登場し、レビュー史上初の「男装の麗人」として人気を得て「ターキー」の愛称で親しまれた。33年に歌劇団で争議が起きた時は「闘争委員長」として会社側と闘った。当時を「弱い者いじめに対する怒りがあったんでしょうね。若さで新しい経験を楽しみました」と振り返っている。戦時中は松竹女子挺身(ていしん)隊として国内外の兵士を慰問した。

飾らない人柄でテレビでも活躍し、NHKでテレビ放送が始まった53年と57年にNHK紅白歌合戦の紅組司会を務めた。53年から15年間続いた人気番組「ジェスチャー」では女性チームのキャプテンとなり、男性チームの柳家金語楼とともに人気者になった。70、80年代にはテレビ朝日系「独占!女の60分」の司会、フジテレビ系「オールスター家族対抗歌合戦」の審査員としても知られた。

85年、実兄の息子である故三浦和義氏のロス疑惑事件で、三浦氏が水の江さんの隠し子と一部で報道され、否定する騒動もあった。93年には「会いたい人に会っておきたい」と森繁久弥さんを葬儀委員長に「生前葬」を行い、芸能関係者約500人が集まった。翌94年に映画「女ざかり」出演を最後に、65年を超える芸能生活から引退。70年に移り住んだ神奈川県中井町の丘の上にある自宅で愛犬とともに悠々自適の隠居生活を送り、「もう思い残すことはない」と話していたという。

[2009年11月22日9時14分]

人柄がよく、さっぱりして、
からっとした性格の人
今を大切に、人生を楽しんだ人
仲間作りが上手だった
自然に年をとればよいと考えていた



1936年

1955年、石原慎太郎の『太陽の季節』が芥川賞を受賞。日活は以前から映画化権を獲得しており、企画部の荒牧という人物が映画化実現のために奔走し、瀧子がプロデューサー中で唯一興味を示した。賛否両論が巻き起こっていた内容に、社内では「こんな不道德なものを」という反対意見が起こったが、芥川賞を受賞したことで製作の方向へ傾いた。瀧子は当初原作者の石原慎太郎を主演として考えていたが、慎太郎と打ち合わせを重ねるうちに「一度弟に会ってほしい」と頼まれ、芥川賞受賞記念パーティーで慎太郎の弟・石原裕次郎に引き会わされた。瀧子はそのときの印象を次のように述べている

「一目で『これはいける』と思った。不良って言ってもね、本当の不良かどうかは雰囲気で見分かります。裕ちゃんにはそういう暗い翳はなかった。輝きがありましたから。
(中略)やっぱり今までになかったタイプの青年でしたね。戦後アメリカがどっと入ってきたでしょう。ところが周りの日本人社会見たってそういうのは全然いなかったわけですよ。裕ちゃんにはそういう、ややアメリカ的な感じがあるでしょう。身長はあるしね」

続く『狙われた男』では助監の中平康を監督に抜擢。会社からは「まだ早い」と反対されたが、瀧子は「早くたって会社のためにいいものができればいいじゃないの」と説き伏せた。さらに次回では裕次郎を初の主演に据え、監督に引き続き中平を起用して『狂った果実』を製作。は日本国内でのヒットのみならず国外でも高く評価された。

『太陽の季節』『狂った果実』の二作で裕次郎はスターの地位を確立し、以後「裕次郎映画」が次々と製作され、日活は黄金時代を迎えていった。この頃から瀧子は裕次郎を自宅2階に下宿させ始める。この理由について熊井啓は、態度が大きく重役から反発を買っていた裕次郎を、瀧子が手元で監督する意図があったとしている。会社が裕次郎のために家を建ててからは瀧子もその敷地内に家を建て、裕次郎、後にその妻となる北原三枝(石原まき子)などの若手俳優や、中平康、熊井啓、斎藤耕二、蔵原惟繕といった若手監督が入り浸るようになった。蔵原は瀧子が「一種の才能集団みたいな息吹を裕ちゃんの周りに作り上げていった」とし、瀧子宅に若者が集ったことは「裕ちゃんと次の世代の監督、つまり我々の、才能を結びつけてゆく前段階であった」と述べている。